

食品の安全性に係る リスクコミュニケーションの効果に関する調査概要

内閣府食品安全委員会

調査概要

- 目的
 - リスクコミュニケーション(意見交換会)の効果測定
 - 効果的なリスクコミュニケーションの推進に向けた知見の収集
- 方法
 - 介入試験

一般生活者(調査モニター)
無作為割付



介入(形式が異なる意見交換会)



グループA 介入群
249名



講義型
意見交換会
テーマ「残留農薬」



グループB 介入群
239名



グループディスカッション型
意見交換会

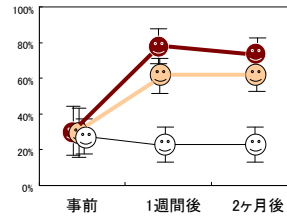


グループC 対照群
381名



何もしない

アウトカムの比較



意見交換会に対する評価・意見(来場者より)

講義型

- 肯定的評価
 - 新しい知識を得た
 - 興味、関心が高まった
 - 今後も参加したい
 - 専門家の話が貴重
 - 質疑で他人の意見を聞いた
- 否定的評価
 - 専門家の説明時間が短い
 - ディスカッション形式がよい

グループディスカッション型

- 肯定的評価
 - 新しい知識を得た
 - 興味、関心が高まった
 - 今後も参加したい
 - 他の参加者に触発された
 - 一方的でないやり方である
- 否定的評価
 - 専門家の説明時間が短い
 - 事前に講義が必要
 - 質問への回答・対話が不十分
 - グループ・人数が多い

会合の満足度を高めるという視点からは、次の点の必要性が示唆される。

- ・講義とディスカッションの併用
- ・十分な質疑応答・対話
- ・適正規模・時間配分

3

調査結果:意見交換会による知識、態度、行動の変化(1)

- 知識獲得
 - 「知っている」という自己認識の向上
 - 意見交換会で伝えた内容の理解

項目	グループC(対照群)		A(講義型)			B(グループディスカッション型)			
	該当率	該当率	比率差 (vs.C)	変化	該当率	比率差 (vs.C)	変化		
食品に残留する農薬の安全性がどのように評価されているか知っている	24.1	91.2	67.0	大きく増加	92.7	68.5	大きく増加	A、Bとも変化あり	
食品に残留する農薬の安全性がどのように管理されているか知っている	18.4	90.4	72.0	大きく増加	87.9	69.6	大きく増加	A、Bとも変化あり	
農薬は摂取するたびに人体に蓄積されている	77.2	43.0	-34.2	大きく減少	42.2	-34.9	大きく減少	A、Bとも変化あり	
農薬は、すべて健康への影響が科学的に評価され、基準値が決められている	51.2	85.1	34.0	大きく増加	85.8	34.6	大きく増加	A、Bとも変化あり	
残留農薬の基準値は、動物実験の結果をもとに、毎日一生通にわたって摂取しても悪影響がないと判断される量として設定されている	51.4	91.2	39.7	大きく増加	89.2	37.8	大きく増加	A、Bとも変化あり	
基準値の2倍の農薬が付着した野菜を数回食べたからといって、すぐさま健康に悪影響があるわけではない	62.7	92.0	29.2	大きく増加	92.7	29.9	大きく増加	A、Bとも変化あり	
基準値が設定されていない農薬等が一定量以上含まれる食品の流通は原則として禁止されている	49.3	81.5	32.2	大きく増加	85.8	36.4	大きく増加	A、Bとも変化あり	
洗浄前の野菜の多くには農薬が残留している	64.6	43.4	-21.2	大きく減少	46.1	-18.4	減少	A、Bとも変化あり	
「減農薬」「無農薬」野菜は一般の野菜よりも安全性が高	59.6	26.1	-33.5	大きく減少	28.4	-31.1	大きく減少	A、Bとも変化あり	
特定の食品の危険性に悩むよりも、栄養のあるものをバランスよく食べることが大切	67.2	91.2	24.0	大きく増加	90.9	23.8	大きく増加	A、Bとも変化あり	

4

調査結果:意見交換会による知識、態度、行動の変化(2)

- リスクに対する認識に変化(受容、不安緩和側)
 - ベネフィット(農薬の効用)の想起
 - リスクの観念的な理解(但し、必ずしもリスクを受け入れるというわけではない)
 - 講義型では、食品のリスクはそれほど大きくないことの理解

項目	グループ C(対照群)		A(講義型)		B(グループディスカッション型)			
	該当率	該当率	比率差 (vs.C)	変化	該当率	比率差 (vs.C)		変化
いま流通している食品に含まれる残留農薬は自分や家族の健康に被害を与える	48.3	13.7	-34.6	大きく減少	21.1	-27.2	大きく減少	A、Bとも変化あり
農薬は社会にとって有益な面があり、管理のもとで使用すべきである	66.9	94.0	27.0	大きく増加	93.1	26.2	大きく増加	A、Bとも変化あり
国民の健康への悪影響がないように、残留農薬は規制や生産・流通段階で管理されている	51.2	88.0	36.8	大きく増加	90.1	38.9	大きく増加	A、Bとも変化あり
どのような食品にもリスクはあり、その大きさが問題である	52.8	68.7	15.9	増加	64.2	11.5	増加	A、Bとも変化あり
多くの食品はリスクが小さく、気にとめるまでもない	13.9	27.3	13.4	増加	21.1	7.2	やや増加	Aに大きな変化
食生活に伴って、一定のリスクが生じるのは仕方がない	42.8	50.2	7.4	やや増加	45.7	2.9		
経済性からみて合理的に達成できる範囲でリスクを小さくすべきである	53.3	63.1	9.8	やや増加	59.1	5.8		
食品は100%の安全が確保されるべきである	22.8	23.3	0.5		22.8	0.0		

5

調査結果:意見交換会による知識、態度、行動の変化(3)

- 信頼感の向上
 - リスク評価、規制の仕組み、法令遵守への信頼感向上
 - 食品安全行政に対する信頼感向上
 - グループディスカッション型は報道に対する信頼性も向上

項目	グループ C(対照群)		A(講義型)		B(グループディスカッション型)			
	該当率	該当率	比率差 (vs.C)	変化	該当率	比率差 (vs.C)		変化
農薬等に対する科学的なリスク評価	41.7	78.3	36.6	大きく増加	74.1	32.4	大きく増加	A、Bとも変化あり
食品の安全管理のための規制の仕組み	36.2	72.7	36.5	大きく増加	71.1	34.9	大きく増加	A、Bとも変化あり
生産者、事業者等の法令遵守	19.9	43.8	23.8	大きく増加	40.1	20.1	大きく増加	A、Bとも変化あり
食品安全委員会	31.2	62.7	31.4	大きく増加	67.2	36.0	大きく増加	A、Bとも変化あり
厚生労働省・農林水産省(うち、食品安全行政について)								
厚生労働省(情報源として信頼)	25.7	58.6	32.9	大きく増加	57.8	32.0	大きく増加	A、Bとも変化あり
農林水産省(情報源として信頼)	13.9	34.9	21.0	大きく増加	31.9	18.0	増加	A、Bとも変化あり
農林水産省(情報源として信頼)	13.4	32.9	19.5	増加	33.2	19.8	増加	A、Bとも変化あり
食品安全委員会(情報源として信頼)	18.4	44.6	25.2	大きく増加	50.9	31.4	大きく増加	A、Bとも変化あり
食品の安全性に関する報道	24.1	32.5	8.4	やや増加	38.4	14.2	増加	Bに大きな変化

6

調査結果:意見交換会による知識、態度、行動の変化(4)

- 「基準値の2倍の農薬検出」との情報に触れたときの行動の変化
 - 意義の少ない回避行動を取る人の減少
 - 講義型では、「何もしない」人がやや増加
 - グループディスカッション型は情報に注意する人が増加

項目	グループ C(対照群)		A(講義型)			B(グループディスカッション型)			
	該当率	該当率	比率差 (vs.C)	変化	該当率	比率差 (vs.C)	変化		
キャベツを食べないようにする	21.3	7.6	-13.6	減少	10.3	-10.9	減少	A、Bとも変化あり	
「減農薬」「無農薬」の野菜を食べるようにする	42.5	21.7	-20.8	大きく減少	25.4	-17.1	減少	A、Bとも変化あり	
残留している量(2倍)に関する情報に注意し、健康に影響があるか考える	58.5	70.7	12.2	増加	72.8	14.3	増加	A、Bとも変化あり	
その農薬についての安全性に関する情報を収集する	47.0	61.4	14.5	増加	67.7	20.7	大きく増加	A、Bとも変化あり	
食品安全委員会、都道府県など行政機関からの情報に注意する	47.5	70.7	23.2	大きく増加	72.8	25.3	大きく増加	A、Bとも変化あり	
食品安全委員会「食の安全ダイヤル」など行政機関に聞いてみる	13.4	26.1	12.7	増加	30.2	16.8	増加	A、Bとも変化あり	
A県産の野菜を食べないようにする	52.8	41.0	-11.8	減少	45.3	-7.5	やや減少	Aに大きな変化	
何もしない(気にしない)	20.7	30.5	9.8	やや増加	21.1	0.4		Aに大きな変化	
生産現場に近い関係者の情報に注意し、健康に影響があるか考える	46.5	53.8	7.4	やや増加	59.9	13.5	増加	Bに大きな変化	
キャベツを買ったらよく洗うようにする	73.0	74.3	1.3		75.4	2.5			

7

調査結果:意見交換会による知識、態度、行動の変化(5)

- 日常的な行動の変化
 - 行政からの情報を得る人が増加
 - 講義型では、危険性を意識しない人の増加、回避行動をとる人が減少

項目	グループ C(対照群)		A(講義型)			B(グループディスカッション型)			
	該当率	該当率	比率差 (vs.C)	変化	該当率	比率差 (vs.C)	変化		
食品の安全性が気になったときには行政からの情報を得るようにしている	11.8	26.1	14.3	増加	28.9	17.1	増加	A、Bとも変化あり	
食品の安全性について情報収集している	17.8	26.1	8.3	やや増加	27.6	9.7	やや増加	A、Bとも変化あり	
食品、手、調理器具などを清潔に保つようにしている	59.3	77.1	17.8	増加	73.3	14.0	増加	A、Bとも変化あり	
普段は特に危険性を意識せずに食品を選択している	43.8	61.0	17.2	増加	54.3	10.5	増加	Aに大きな変化	
問題があると話題になった食品は買わない	47.0	39.2	-8.8	やや減少	45.7	-1.3		Aに大きな変化	
「減農薬」「無農薬」野菜を購入している(健康に対する不安から)	22.8	12.4	-10.4	減少	15.5	-7.3	やや減少	Aに大きな変化	
加熱すべき食材は十分に加熱する	68.0	79.5	11.5	増加	78.0	10.0	増加		
なるべく国産のものを購入するようにしている	57.5	61.0	3.6		65.9	8.5	やや増加		
信頼のおける店舗や宅配などから食材を購入している	28.6	34.9	6.3	やや増加	36.2	7.6	やや増加		
消費期限、賞味期限を厳守している	24.9	28.9	4.0		33.2	8.3	やや増加		
作り置き、買い置きをしないようにしている	15.7	18.5	2.7		14.2	-1.5			
「減農薬」「無農薬」野菜を購入している(環境への配慮から)	13.9	10.8	-3.1		12.1	-1.8			

8

調査結果：意見交換会による知識、態度、行動の変化：まとめ

- 知識獲得
 - 「知っている」という自己認識向上
 - 意見交換会で伝えた内容の理解向上
- リスクに対する認識に変化(受容、不安緩和側)
 - ベネフィット(農業の効用)の想起
 - リスクの観念的な理解(但し、必ずしもリスクを受け入れるというわけではない)
 - 食品のリスクはそれほど大きくないことの理解向上(特に講義型において)
- 信頼感の向上(特に食品安全行政に対して)
- 行動の変容
 - 意義の小さい回避行動をとる人の減少
 - 清潔維持などの波及効果
 - 情報を収集し、影響を考える人の増加
 - 行政機関・行政情報の利用意向の高まり
- 効果は持続(1週間後と2ヶ月後で差異なし)
- 講義型、グループディスカッション型の特徴
 - 講義型→”冷静”
 - 意義の少ない回避行動減少、「意識しない」「何もしない」増加
 - グループディスカッション型→”能動”
 - 「基準の2倍の農業検出」に接した際に、何らかの行動をとる人の割合は全体的に グループディスカッション型 > 講義型
 - 但し、期待していない(趣旨に反する)方向に変化することもある。

2ヶ月後における介入群と対照群の差異

分類	項目	A(講義型)		B(グループディスカッション型)				
		前測定	後測定	前測定	後測定			
知識	食品に有害な化学物質が食品中に含まれていると認識されている割合	24.1	81.2	67.0	0.0000 **	42.7	68.3	0.0000 **
	食品に有害な化学物質が食品中に含まれていると認識されている割合(有害物質が食品中に含まれていると認識されている割合)	18.4	90.4	72.0	0.0000 **	87.9	68.8	0.0000 **
内閣理解	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	77.2	43.0	-34.2	0.0000 **	42.2	-34.9	0.0000 **
	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	51.2	45.1	34.0	0.0005 **	85.8	34.6	0.0000 **
内閣理解	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	51.4	91.2	39.7	0.0000 **	89.2	-37.8	0.0000 **
	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	62.1	49.0	20.2	0.0005 **	92.7	23.9	0.0000 **
内閣理解	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	49.3	81.5	32.2	0.0000 **	85.8	36.4	0.0000 **
	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	64.0	43.4	-21.2	0.0000 **	46.1	-18.4	0.0000 **
内閣理解	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	59.0	28.1	-31.5	0.0000 **	28.4	-31.1	0.0000 **
	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	67.2	91.2	24.0	0.0000 **	90.9	23.9	0.0000 **
健康への認識	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	48.3	13.7	-34.6	0.0000 **	91.1	-27.2	0.0000 **
	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	66.9	94.0	27.0	0.0000 **	23.1	24.2	0.0000 **
健康への認識	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	51.2	88.0	36.8	0.0000 **	90.1	38.8	0.0000 **
	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	41.7	79.3	37.6	0.0000 **	74.1	32.4	0.0000 **
健康への認識	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	19.5	43.8	24.3	0.0000 **	40.1	20.1	0.0000 **
	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	19.5	43.8	24.3	0.0000 **	40.1	20.1	0.0000 **
健康への認識	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	31.2	62.7	31.4	0.0000 **	67.2	36.0	0.0000 **
	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	25.7	55.8	30.1	0.0000 **	57.8	32.0	0.0000 **
健康への認識	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	13.9	24.9	11.0	0.0000 **	31.9	18.0	0.0000 **
	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	18.4	44.8	26.2	0.0000 **	50.9	31.4	0.0000 **
健康への認識	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	21.3	71.6	50.3	0.0000 **	10.3	-10.9	0.0011 **
	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	42.3	21.7	-20.6	0.0000 **	25.4	-17.1	0.0000 **
健康への認識	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	56.5	70.7	12.2	0.0038 **	72.8	14.3	0.0006 **
	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	47.0	61.4	14.5	0.0005 **	67.7	20.7	0.0000 **
健康への認識	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	47.3	70.7	23.2	0.0000 **	72.8	25.3	0.0000 **
	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	13.4	26.1	12.7	0.0001 **	30.2	16.8	0.0000 **
健康への認識	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	17.9	26.1	8.3	0.0472 **	27.8	9.7	0.0160 **
	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	11.3	26.1	14.8	0.0005 **	26.9	17.1	0.0000 **
健康への認識	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	52.3	48.7	-3.4	0.0002 **	44.2	-11.5	0.0145 **
	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	52.3	41.0	-11.3	0.0102 **	45.3	-7.5	0.2048 **
健康への認識	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	43.7	61.0	17.2	0.0010 **	54.3	10.9	0.0344 **
	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	22.6	12.4	-10.4	0.0005 **	15.5	-7.3	0.0090 **
健康への認識	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	13.9	27.3	13.4	0.0000 **	21.1	7.2	0.0136 **
	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	41.0	50.5	9.5	0.0048 **	40.7	-1.1	0.0060 **
健康への認識	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	24.1	32.0	8.4	0.0002 **	38.4	14.2	0.0004 **
	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	46.5	53.8	7.2	0.2667 **	59.9	13.1	0.0004 **
健康への認識	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	73.0	74.3	1.3	0.3832 **	72.4	2.5	0.6850 **
	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	57.5	61.0	3.6	1.0000 **	65.9	8.3	0.1068 **
健康への認識	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	13.9	10.9	-3.1	0.0101 **	12.7	-1.8	0.0090 **
	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	45.3	48.3	3.0	0.0005 **	44.2	-1.1	0.0006 **
健康への認識	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	45.0	48.3	3.3	0.0005 **	44.2	-1.1	0.0006 **
	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	45.0	48.3	3.3	0.0005 **	44.2	-1.1	0.0006 **
健康への認識	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	42.9	48.3	5.4	0.0005 **	44.2	-1.1	0.0006 **
	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	42.9	48.3	5.4	0.0005 **	44.2	-1.1	0.0006 **
健康への認識	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	53.3	63.1	9.8	0.0444 **	59.1	5.8	0.4764 **
	農業は、すべて健康への影響が科学的に証明されている	22.9	23.3	0.5	1.0000 **	22.8	0.0	1.0000 **

今後のリスクコミュニケーション(意見交換会)に係る推奨事項

- (1)計画・準備
- 1) タイトルのつけ方
 - 推奨事項
 - 生活者の目線からタイトルを付与。具体的かつ容易にテーマを想起できるようにする。
 - 狙い
 - 自分にとって関わりがある問題であると感じてもらう。
 - 方法(例)
 - サブタイトルに「どうしたらいいの?」「安全なの?」など生活者の目線と「基準値の2倍の農薬」などシチュエーションが見える文言を入れる。

11

今後のリスクコミュニケーション(意見交換会)に係る推奨事項

- 2) 内容の設定
 - 推奨事項
 - 参加者が知りたいと思うことを事前にたずねて内容に反映し、事前にたずねた内容を反映したことを伝える。
 - 狙い
 - 参加者にとって有用な内容にする。
 - 主催者の誠意を伝える。
 - 方法(例)
 - 応募フォームに「○○について、あなたが知りたいこと」の欄を設ける。
 - 参加者からの意見を反映したことを参加者に伝える。

12

今後のリスクコミュニケーション(意見交換会)に係る推奨事項

- 3) 告知・募集
 - 推奨事項
 - 募集にあたっては、食品安全とは無関係な媒体、告知方法を含める。
 - 開催回ごとにターゲットを明確に設定する。既存のコミュニティを活用してもよい。
 - 狙い
 - 普段は積極的に情報を取得しない層や知識がない層からの参加を得る。
 - 対象となる層に対して、自分にとって関わりがある問題であると感じてもらおう。
 - 方法(例)
 - 店頭、宅配業者の配布物、新聞、雑誌(週刊誌等)、ネットニュースなど利用者が受動的(非選択的)に情報を受け取るメディア)を利用する。
 - 「子供がいる人向け」「家庭の安全を守る立場の人向け」などターゲットを絞り、学校での告知、「3歳児健診」受診者に対する告知など、ターゲットに到達しやすい手段で告知する。
 - 保護者会、習い事など、既にあるコミュニティに対して参加を求める。
 - 参加のインセンティブをつける(ノベルティ、登録制モニターデータベースから調査事業として参加を求める)。

13

今後のリスクコミュニケーション(意見交換会)に係る推奨事項

- (2)実施
- 1) 実施形式
 - 推奨事項
 - 講義、グループディスカッション、専門家との対話を組み込む。
 - 狙い
 - 各方式の利点を組み合わせて、満足と理解を得る。
 - 方法(例)
 - プログラムに以下を組み込む。
 - 体系的な説明(講義)
 - 他者の意見による触発、考えの正当化・相対化(グループディスカッション)
 - ふだん触れることのない専門家と接する経験(対話)
 - 理解と納得(質疑応答)
 - テーマによって、グループディスカッションと講義のウェイトを変える。
 - 馴染みが薄い問題、論点があはつきりしていない問題はグループディスカッションを充実
 - 明確な論点について事実が知りたいという問題は講義を充実
 - 参加者の知識によって、グループディスカッションと講義のウェイトを変える。
 - 知識が少ない層が多い場合には講義を充実

14

今後のリスクコミュニケーション(意見交換会)に係る推奨事項

- 2) 講義
 - 推奨事項
 - 説明事項の量に照らして講義時間を十分にとる。
 - 具体性のある説明に努める。
 - 対立がある論点については両論にふれる。
 - 補完手段(DVD等)を活用する。
 - 狙い
 - 効果的な知識の提供。
 - 方法(例)
 - 資料をすべて説明するのに十分な時間を設定する。
 - 日頃寄せられる質問、報道内容などを参考に、対立がある論点を把握し、講義内容に含める。
 - 抽象的概念だけでなく実例を示す。(安全評価であれば計算例など)
 - 導入段階でDVD視聴

15

今後のリスクコミュニケーション(意見交換会)に係る推奨事項

- 3) グループディスカッション
 - 推奨事項
 - 規模を適正とする。
 - 意図、タスクを明確に伝える。
 - ディスカッション前に講義を行うなど、主要なメッセージはあらかじめ伝えておく。
 - ファシリテータにより議論をコントロールする。
 - グループの成果物を十分に活用する。
 - 狙い
 - 議論の円滑化。
 - 参加意識と満足度を高める。
 - 方法(例)
 - (参加者6名+ファシリテータ)×8グループ以下とする。
 - ディスカッションで求める成果物のイメージを提示する。
 - 各グループに対して、専門家、他の参加者が講評、コメントする時間を設ける。

16

今後のリスクコミュニケーション(意見交換会)に係る推奨事項

- 4) 対話・質疑応答
 - 推奨事項
 - テーマをカバーできるように専門家を立てる(場合により複数)。
 - 専門家の資質(能力、人柄、立場など)に留意する。
 - 共感を示しながら対話する。
 - テーマを逸脱する質問を想定し、あらかじめ線引きを設定する。
 - 事後に個別の質問時間を設けるなど、大勢の前で質問できない人に配慮する。
 - 狙い
 - テーマに関する専門的な知識を提供できるようにする。
 - 意見交換会の趣旨、メッセージに対する信頼感を高め、メッセージの受容を促す。
 - 運営の円滑化
 - 方法(例)
 - テーマを網羅できるように専門家を複数立てる。
 - 当日回答できない質問に対して、後日回答する方法をあらかじめ想定する。
 - (ホームページ掲載、事後メール)
 - 相手に対する理解を示す、一市民としての自らの経験などを織り交ぜて対話するなど、共感を示す。
 - 終了後に専門家やスタッフが個別に質疑応答を受け付ける。
 - 事後アンケートでも質問を受け付ける。

17

今後のリスクコミュニケーション(意見交換会)に係る推奨事項

- 5) 配布資料
 - 推奨事項
 - 配付資料は説明しきれぬ量とする。
 - 資料のみで内容が理解できるようにする。
 - 狙い
 - 駆け足説明の回避、「配布しただけ」との不満を回避する。
 - 関心が高まった参加者の事後学習や参照に利用してもらい、知識を深めてもらう。
 - 方法
 - 資料に盛り込む内容の優先順位をつける。以下を優先;
 - 応募者にあらかじめたずねた関心事項・疑問、頻出の質問
 - 体系的な説明を要するトピック(毒性評価～基準値設定などの流れなど)
 - 資料を見ればわかるように説明文や用語解説をつける。

18

今後のリスクコミュニケーション(意見交換会)に係る推奨事項

- (3)フォローアップ
- 1) 会合後の情報提供
 - 推奨事項
 - 当日の説明が不足した部分について情報提供する。
 - 情報提供や対話を継続する仕組みを確保する。
 - 狙い
 - 理解と納得をさらに深める。
 - 興味、関心の維持、対話の継続。
 - 方法(例)
 - 議事録、質疑応答内容の提供(メール、Web掲載など)
 - 参加者を対象とした情報提供や対話を継続(メルマガ、コミュニティサイトなど)
 - 参加経験者の組織化